

異郷への誘い

—日本の昔話における海—

久保華誉 (学習院大学／武蔵野大学)

キーワード 海、異郷、日本の昔話、口承文芸

異郷譚

昔話の中でも、海は重要な役割を持っている。日本の昔話の中で海にまつわる話をいくつか紹介したい。まず日本の昔話の各話を分類し整理した『日本昔話大成』(全12巻、角川書店)のなかで関敬吾は、「異郷」の標目を掲げた。この「異郷」で、「海底の世界と関係する昔話をわずかにあげた」として、海を舞台とした話を、「竜宮童子」、「浦島太郎」、「玉取姫」の3話あげている(関、1978)。

海からの使い「竜宮童子」

まず「竜宮童子」は、こんな話である。あ

く伝説でもある。明治時代の児童文学作家、巖谷小波は、子どもにじめられていた亀を助けたのが発端という「亀の恩返し」を強調し、それも定着した。8世紀ころには成立したと考えられる『丹後国風土記』の浦島太郎では、天女に見初められ、亀に変わった竜宮ではなく海の彼方の島に行くことになっている。それが室町時代のお伽草子では、海中の竜宮に変わってゆく(市古、1986)。またお伽草子では釣られた亀が女になり、太郎と夫婦になっているため、人間以外と結婚する話、異類婚姻譚でもある。海という「異郷」で「異類」と結ばれるという、「異」の要素も強いのが分かる。

命をかける海女「玉取姫」

「玉取姫」は九州や四国で数話語られる程度で、いままでの2話と比べると圧倒的に採話例が少ない。とは言え、香川県志度寺の縁起にもなり、謡曲「海人」として能の演目にもなっている。藤原不比等が、妹から送られた宝珠を海から現れた手に奪われ、取り戻すために身をやつして海女と結ばれる。海女は命と引き換えに龍神から珠を取り戻し、その息子の房前が寺を建てて弔ったという。この話でも、海に龍神という人知を超える存在が住んでいて、龍神と対峙する人間の姿が描かれる。

想像を超える「大島と蝦」

また笑い話に分類される昔話では、「大島と蝦」(関、1979)という話がある。大島が、自分ほど大きいものはいないと海を

る男が海に(内陸では川と語る場合もある)正月迎えの門松、もしくは薪などを投じる。すると、竜宮から使い(乙姫など)がやってきて、お礼に竜宮に連れて行く。そこで富をもたらす者(鼻たれ小僧など)、もしくは動物(金を産む亀、鶏、犬や猫など)、宝物(打出の小槌、動物の言葉が分かる聞耳頭巾など)を貰う。家に帰った男は、決まりを守って富を得て幸せになる。ここで終わらず、他の家族や、隣の爺、本人のおこった心によって、富を得られなくなったりすることも多い。この話では、陸に住む私たちと異なる別の世界、不思議な海の力が語られている。漁に出かけ海の幸を貰うように、昔話でも、海に出かけて富を得るのが分かる。しかし、真似をして欲を出したり、感謝を忘れたりして、その富は得られなくなってしまう。現代に生きる我々も身につまされる話である。

おなじみの「浦島太郎」

つぎの「浦島太郎」は、海の昔話と言えは真つ先に思い浮かぶ話ではないだろうか。尋常小学校唱歌の「昔々 浦島は 助けた亀に 連れられて 龍宮城へ 来てみれば 絵にもか けない 美しさ」を懐かしく思い浮かべる方も多いだろう。このあと太郎は、乙姫様の歓待を受けて竜宮城の暮らしを楽しむが、帰郷を望み、お土産に玉手箱を渡される。少しの間で帰ったと思つたのに、故郷では歳月は流れ、家族も知り合いも亡くなつてしまつていた。絶望のあまり、開けてはいけませんと言われた箱を開けた太郎は白髪のおじいさんになつてしまつたと語られる。京都府や神奈川県など各地で事物と結びつ

渡つていると、棒が突き出たのでそこで休む。そして一日飛び続けまた棒があつたので、止まると棒が動き出し「私は大蝦だがお前は一日中、私のひげで何をしている？」と言う。大島は自分の思い上がりを恥じるが、蝦は自分はそのなにかいのかと海を行く。すると洞穴があつたのでそこで休み、また一日行くと、同じような洞穴があるのでそこで休もうとすると、それは大きな亀の鼻の穴で、くしゃみをした亀に飛ばされて、蝦は腰が曲がつてしまったそう。こうした想像を超えた大きさの海の生き物たちは、海のスケールの大きさや不可思議さを語っているのだろう。やはり海は陸地との境を隔てた「異郷」なのだ。

海は物語の宝庫

こうした異なる世界との境界は、民俗学を考える際にも非常に重要だ。たとえば、時間の境目もあるが、身近な場所の境目としては、居住する共同体の内と外、道が交差する四辻、川を隔てて向こう岸とをつなぐ橋など。伝説でも、渡辺綱が美しい女に化けた鬼に出会ふのは橋であるし、幽霊になつた女が生まれたばかりの赤ん坊のために船を買いに来たという船家(京都府…)みなどや幽霊子育船本舗)があるのも六道の辻である。

このように古くから口伝えされてきた口承文芸の中で、2つの異なる世界と接する境は、不安定であるがゆえに、怪異がおき、さまざまなドラマが語られる。「異郷」である海は、人にはなくてはならない物語の宝庫なのだ。